

杉谷遺跡の蔵骨器

菰野町杉谷字南谷から、昭和 38 年からの発掘調査の結果、火葬穴・蔵骨器・須恵器・山茶碗・山皿などが発見された。これらの年代は、平安末期から室町期に及んでいる。

四日市市富田町にある善教寺の阿弥陀如来立像(国重文)から、藤原実重の作善日記(125年～1241年)が胎内文書として発見され、その中で実重が多額の奉加料を寄進し、仏堂の建立・仏像の造立・仏事供養などを行ない、功德を積んでいたことが明記されており、この杉谷の地には、池堂・八角堂・不動堂などの御堂が建立され、中世の往時には繁栄を誇っていたことが窺える。それがなぜか、信長の焼き討ち前には衰退してしまっていたようである。

これらの発掘された質の高い陶器が、その頃の繁栄ぶりを物語るものではないかと考えられる。中でも蔵骨器として使用された古瀬戸の瓶子や四耳壺は、唐草模様に灰緑色の灰釉が施され、美術的にも価値のある逸品である。また、古常滑系のものは、灰白色で細砂を含有し、細土捲上げ、ロクロで仕上げられているものがある。他に、中国鉄釉壺・美濃須恵器なども出土している。古瀬戸系の陶器が 33 点、古常滑系の陶器が 17 点、杉谷収蔵庫に収蔵され、展示している。



「古瀬戸四耳壺」



「常滑壺」



「中国鉄釉壺」